

パートナーシップ・トーク



やまざき のぼる
山崎 陽

1975年、新潟県生まれ。新潟市在住。官公庁勤務時の2007年から、阿賀野川流域の地域再生に係る取組に従事し、2011年2月から一般社団法人あがのがわ環境学舎事務局職員。

公害発生地での地域再生を持続可能にする独自の協働を紡ぐために

2007年、新潟水俣病問題を抱える阿賀野川流域において、地域の再生・融和を目指した取組「阿賀野川え〜とこだプロジェクト」が、新潟県の主導により官民協働でスタートしました。そして、数年間の活動を経て、流域に根付き始めた地域再生の動きを今後も自立して継続させていくために、民間関係者が中心となって2011年に設立された団体が「一般社団法人あがのがわ環境学舎」です。

地域再生の鍵となる重要な取組として、「ロバダン!」(炉端談義)と呼ばれる少人数の寄り合いを流域各地で開催しています。これまで100回以上開催され、地域の実情や人々の本音を探れただけでなく、様々な団体とのネットワークも自然と生まれました。

さらに「新しい公共」のスキームを

活用して、「阿賀野川エコミュージアム構想」と名付けたプロジェクトを立ち上げています。「ロバダン!」を組み込んだ「段階的マルチステークホルダープロセス」という独自の合意形成手法を導入したことが、流域の温泉地や地場産業、漁業組合など、様々な団体との協働関係が一挙に拡大することに結びつきました。

現在は従来からの取組と並行して、上記の様々な団体と協働して収益事業を起こしていくことに力を入れて取り組んでいます。例えば、地域資源を生かした商品を開発して製造販売したり、流域全体の観光施策をプロモートする事務局機能を任されています。

今後は団体の持続可能な運営体制を築くために、一刻も早く経済的自立を達成したいと考えています。



すずき みきこ
鈴木 美紀子

仙台生まれ、仙台育ち。2001年より公益財団法人みやぎ・環境とくらし・ネットワーク(MELON)のスタッフとして環境活動に携わり、自然体験を通じた普及啓発や身近なエコの提案、講師活動に取り組む。2010年より東北環境パートナーシップオフィス(EPO東北)スタッフとして従事、東日本大震災発生後から継続している「3.11あの時」ヒアリングに当初より関わる。

ビジネスモデル策定支援を振り返って

平成24年、25年度の環境NPO等ビジネスモデル策定事業は、募集対象団体の要件に「団体の主たる活動エリアが東北地域であること、または東北地域の地域資源を活用する事業であり東北地域の団体と具体的な連携によって実施される事業であること」が盛り込まれました。「地域支援事務局」であるEPOが伴走型の支援を行なうことも大きな特徴で、EPO東北では採択された5つのプロジェクトのうち4つのプロジェクトを支援しました。

地域の環境課題の解決にビジネスの手法でアプローチする、持続可能な事業の計画づくりは、これまで助成金や補助金に頼ってきた環境NPOにとってとても大きな挑戦です。地域にどんな環境課題があり、ターゲットとなるユーザーはどんなことに困っていて、

何を提供することでこれらの課題を解決するのか、プロジェクトの構想を練り直すところから始まります。自分が売りたいもの、皆が良いと言ってくれるものが売れるとは限りません。一般へのヒアリングや試験販売などの実証を経て、プロジェクトの方向性が大きく変わることもありました。

地域支援事務局から皆さんに出したリクエストは「わくわくするストーリーが語れること」です。プロジェクトを伝え、広めるためには必須事項だと考えています。ソーシャルビジネスによって新しい社会的サービスを生み出すことは、新しい価値観を創造することでもあります。事業の広がりとともに、新しい価値観が広がっていくことを期待します。